

国語 第1学年 ひらがなをつかおう (1～2)

検討会の想定問答

指摘 1：この単元の中心となる学びは何か。

返し：促音・拗音・助詞などの表記の読み返しである。〔知識及び技能〕(1)ウとB(1)エの学習を、読み返しの印と書き直した生活文に表れる言葉の選択や説明で捉える。

指摘 2：本時の発問は何を考えさせるのか。

返し：「口で言った言葉と、書いた言葉は同じ発音になりますか」によって、印象だけの答えから、語句や事実を根拠にした判断へ進ませる。予想として「へ」は行く先を表しているので、音だけで字を決めない」が考えられるが、同じ発言を言わせることが目標ではない。B(1)エを評価する。

指摘 3：どんな誤解を予想し、どう手当てするか。

返し：聞こえる音だけで助詞や小さい文字を書くことを予想している。音を区切る手拍子と文の中での役割の確認を分け、助詞は文で読み比べる。知識を先に言い渡すだけにせず、比べた例から児童自身が説明を直せるようにする。〔知識及び技能〕(1)ウに関わる支援である。

指摘 4：何を記録に残せば評価できるか。

返し：読み返しの印と書き直した生活文の途中と仕上げの記録を残す。選んだ語句・判断した理由・修正の根拠が見えるかをB(1)エに照らす。書いた文字数や提出の早さでは評価しない。

指摘 5：意見が異なる場合は、どちらを正解にするか。

返し：語の意味や表記など確かめられる内容は、辞書・本文・公式資料に戻す。感じ方や表現の選択は、対象の言葉と理由が結び付いているかを見る。口で言った言葉と、書いた言葉は同じ発音になりますかという問いに対する説明を比べ、好みの一致を求めない。

指摘 6：活動に参加しにくい児童への配慮はどうするか。

返し：音を区切る手拍子と文の中での役割の確認を分け、助詞は文で読み比べる。さらに、口頭・指さし・短いメモなどで考えを示す方法を用意する。学習指導要領の第3の1(9)を踏まえ、困難さに合わせて方法を変えても、言葉について考える内容は保つ。

指摘 7：主体的に学習に取り組む態度は本時だけで決めるか。

返し：単元の途中の見直しと、その後に使う場面を考えた記録を合わせて判断する。学年の目標(3)を踏まえ、発言が多いことや教師に従うことを、そのまま態度の高い評価にしない。

指摘 8：時数と活動の配当は何を根拠にしたか。

返し：総時数は東京書籍の単元一覧の2時間による。総時数は東京書籍の公式単元一覧による。以下の活動の配分と本時の位置は、本案で提案する授業計画である。複数回の練習をまとめた項目で、連続して実施するのではなく、該当する教材を学んだ時期に分けて扱う。活動量を調整する際も、問いに自分で答える場面と、その理由を検討する場面は残す。

指摘 9：端末がなくても実施できるか。

返し：読み返しの印と書き直した生活文は紙で作成できる。端末を使う場合は、途中と修正後の比較や拡大提示に使う。操作の巧拙はB(1)エの評価に含めず、言葉の内容を見取る。

AIが作成した授業案です。授業での検証は未実施です。自校の教材・年間計画・学級の実態に合わせて確認してください。



Threads「三重でAI使うなら」(@mie_ai_katsuyo)
https://www.threads.com/@mie_ai_katsuyo

LINEオープンチャット
みえ先生ラボ

